

(一ツの事情)があつてたすねたら こふゆふさしずがあつたと みんなにさとしてくれにやならん 第一のところ身上にこれたけかゝれば なにかまちかふのであるふとおもふ 身のさわりといふ たいないの事情ならあんしる とをなりこふなり一日の日におさまるところ はしめかけたる年限の間 けふ一日までの所 しやんしてミよ かるきとわおもふなよ かるき身てわないほどに」(87才)

これまでつくした処 一粒萬倍の里にかやすとさとしたる とふゆふ事みるきく とこから 何の里もなきによつて 身上もあんしる事いらんといふ あとへハのちへの席 又々こくけんにもしらす さあへわすかの事情へ

(注)これは、明治27年2月14日「増野正兵衛身上齒の痛みに付願」である。正文と対照するとき、そう大きな違いは認められない。

28 明治廿七年七月 朝鮮事件二付 明日ヨリ三日間祈禱執行願」(87ウ)

さあへ尋る処 いかなる事情も尋にやなるふまい 尋る助け一条の事情 処々国々とをく処迄も 助ヶ一条てたすけるたすけるといふ ミなといたる 早くへそれへみんなはやくの心になつて 何でもかてもをさめにやならん おさまらにやならん 処々にてハそれへ心の里をもつて はやくたすけ被下といふ願をしておさめ 一寸にわおさまるふまい」(88才)

なれと引もとしてしもふ 大事件あのくらの事情 早く事情になつたなあと 早くミせにやならん みにやならん

押て各分教支教会出張所布教事務所

さあへ早く皆々勤といふ おさめ方のつとめといふ 早くいそくへ

押て勤めの手御願」(88ウ)

さあへ一時の処□□ はやく何かの御守護ノ里をもつてねかうかよい

押して明日より くの御願

さあへちからへちからへ」(89才)

(注)これは明治27年7月30日「朝鮮事件に付明日より三日間軍人健康祈禱執行願」である。押しての伺の順序に違いをみる。

29 中野支教会長様身上御伺 廿七年三月十五日 四十年 さあへ尋る事情へ いかなるも尋るてあるへ さあへ是よふきゝわけ 尋る中にきゝわけにや わかりかたない さしずしたなら かならずわかるよふにをもふ さしず かわるさしず あたわんさしずわない 一人事情」(89ウ)

とんなさしす かわるさとしも いくてにもなる きゝよとりよでちがふ よふきゝわけ 所にて一ツ事情はじめて なるほどさだめ なるほとつたへたる 其中の一人身上せまる とれだけはなしすれと 身上すみやかならん所をきゝわけ 是迄身上とをこふないで はなし」(90才)

して一つをさまれば すくとをさまる 是きゝわけ をさまらん里をきゝわけ どをなるこふなる日々をもふ おもふ八里である よふきゝわけ 一時ならんとゆうハ一時ならんやない そこではやくきゝとらし 所ははじめかけたる だいである そ

こで だいかわからねバ さきへみなわからん をやが」(90ウ)

わからにや子かわからん 萬事情はこび 世界あからへ事情はこび 是ハたいとして 事情はしめてくれにやならん」(91才)

(注)これは「補遺」に「小棍與兵衛四十才身上願」として記載。

この29以下は、近愛の関係する教会役員などの書き下げが記載されている。そうすると、そこに何らかの編集作業があったといえる。単なる写しに止まるものでない。

30 第三百巻号 講元 瀬戸新七 四拾七年

さあへたすねる事情へ さあ身上の事情 いかなる里だすねる所 よく事情きゝわけにやわかりがたない たいてへ事情の里ハ みなわかりある わかりある中に 身上長らへて大へんこまるであるふ 事情よふきゝわけ 内々とゆふ 家内それぞれいかな」(91ウ)

る事みればなあ きけばなあ これをもわずゆわず 一ツの里どんな里 大なん小なんこれきゝわけ 一ツわさとす事情 世界さとして事情 又いんねんさとするである みな借物さとするであるふ さとする処きかわけバあざやか 身の内あんじなき事情を以て なんてなあ世界なあ 是を」(92才)

をもわず 心にをさめ つたわろへ 是きゝわけて なんてぞいなあと云ふ里を収たんが あらためた事情である あんじる事いらん しいかりいかならん よくきゝ取ってくれるがよい

(注)瀬戸新七は近愛役員。明治25年11月11日「瀬戸新七四十七才身上障りの処願、それに付、家内の身上も申し上げ願」として補遺に記載。

31 明治廿四年七月七日 第二百四拾八号 講脇 出口吉松 三十四年」(92ウ)

さあへ身上一条たすねるからさとするのにわ 身上一条の里おきゝわけなら なにかのことわかるであるふ 人にもさとしてもいるやろ きいてもいるやろふ さあへわからんやあろふまい 神の子供 なんぎさそふ ふじゆさそふといふおやハあろふまい 身の内ハ神のかし物かりものをさとするにわ 心わわかもの こゝろへとおり神がはたらく」(93才)

この里をよくきゝわけ ぜんしよいんねんわろふまい わからんからたすねるへ 事情世上にわ みなへどんなものもうつしてある 此里をきゝわけ 人間ハうまれかわり でかわり 里きゝわけよ さあへ身上ハよほとたいそふである さあへとうせにやいかん こふせにやいかんとハ 神わゆわん 内々家内も この里をきゝわけよ 身上のふてハたのしみ」(93ウ)

あろふまい みんならんもぜんしよいんねん ふんばらにやなるふまい たすからにやなるふまい 人おたすけると云ふ心 たすけにやならんか天ノ里 これたけつくすのに なんととおもふ心もたずして 内々まことのこゝろが むつましいと云ふ この里をさとしをく 身上今一時どうともない 身上あんじるとあんしの里かまわる さあへ内々むつま」(94才)

じいか第一と云ふ

(注)身上伺。補遺に記載。近愛役員か。